子どもの願いを教育の出発点に

ともに学び合って素敵な実践つむごう

大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

大障教新転任歓迎教研①

4月23日、大障教・新転任歓迎教研①が会場（たかつガーデン）とオンライン併用で開催され、約50人が参加しました。白石正久さん（龍谷大学名誉教授）を講師に、「発達をはぐくむ目と心～子どもの発達への願いを理解するために～」と題してお話していただきました。

子どもの発達を学ぶ大切さ

講演の冒頭に白石先生は、「障害があろうとなかろうと、すべての人は精神発達において共通の道筋を歩みます」と「発達」を学ぶ大切さを強調しました。そして発達の変化のしくみや発達段階ごとの子どもの姿を、具体的に写真やエピソードをまじえて解き明かしていきました。その一部を紹介します。

山梨県の自宅からリモートで講演する白石正久さん

○1歳半の節では、10か月頃に心の支えとなる大人として、「第二者」を強く求めるようになります。そして相手の要求や状況の変化を受けとめて、「○○ではない□□だ」と自分を切り替える力を獲得していきます。

○2～3歳頃の子どもが踏み入る「2次元の世界」では、子どもは対比的認識（全体と部分、大・小など）の力を獲得するようになり、「小さい自分」ではなく「大きい自分」になりたいと願うようになります。その一方で葛藤もあり、矛盾も強まります。

○そこを越えてきた子どもは、「3次元の世界」に踏み入り、中くらいの世界が認識できるようになります。「だんだん大きくなる」自分を求め、自己主張ばかりではなく、相手に視点を移して相手の立場に立って感じたり、考えたりできるようになります。

写真やその時の様子など子どもの具体的な姿を通してお話を聞き、これまでの子どもとの関わりを思い出して、自分はちゃんと子どもの心を「受けとめ」られていたのかなとかえりみ、発達段階を理解して子どもとかかわることの大事さをあらためて実感しました。

子どもへの共感から教育ははじまる

また、白石先生は障害のある子どもたちの教育においても発達段階を踏まえる重要性を説きました。視線で気持ちを一生懸命に伝える子どもの姿や、一見「こだわり」に思える子どもの行動から本当の要求が見えてきたことなど、さまざまなエピソードを紹介しながら、子どもを「理解する」とはどういうことか、「子どもの思い、おかれている生活を理解し、その根っこに共感することから教育は始まる」と力説しました。

最後に白石先生が雑誌『みんなのねがい』連載中の文章の中で、教師の同僚性について書いたところ反響が大きかったことに触れました。白石先生は「今の学校現場の大変さを感じた、だからこそ力を合わせて手をつなぎがんばろう」「それが組合」という言葉で講演を結び、私たちを励ましていただきました。

プログラムの最後に、奥青年部長から、「働く環境を良くしていくことで、子どもの教育や教育環境を良くしていきたい。一人ひとりの声を集めて、一緒に声をあげていきましょう。そしてコロナ禍のもと、つながりにくい状況にあるが、青年部では交流を大事にしていきたい」と組合加入の訴えがありました。

次回の新転任歓迎教研②は、絵本作家の長谷川義史さんを講師に、6月3日（金）阿倍野区民センターにて現地開催のみで行います。ぜひ、ご参加ください。

（教文部　荒谷美里）

参加者の感想

○初めて支援学校で働くことになり、右も左もわからない状況ですが、子どもたちと向き合うための基礎を学ぶことができました。

○発達について、改めて立ち止まって学ぶことができました。目の前の子どもと丁寧にゆっくり関わり、発達を理解していこうと思いました。

○自分が本当に子どもの本当の要求を見つけているのだろうかという眼ざしで、これからも子どもと関わっていきたいと思います。

大障教ホームページアドレス　http://fc06631220171211.web2.blks.jp/　Eメールアドレス：fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

「野菊よ、その花は貧しくとも 風霜に耐えて咲け」との願いを込め、「のぎく寮」と名付けられ生活施設があった。そこには、「就学猶予」のもと、学ぶ権利を奪われた障害児も暮らしていた。設置は一九五三年、全国的にも非常に珍しく、公的援助が一切ない中での運営であった。

「のぎく寮」を設置・運営したのは近藤益雄とその家族。益雄は、佐々町口石小学校に障害児学級を開設し、担任もしていた。障害児教育の草分けだ。五月十七日は、益雄が心労重なり命を絶った日。一九六四年、五十七歳だった。

一九六四年は私が産まれた年。彼の年齢に私も到達した。私が青年だった時、書籍で「益雄」に出会って三十数年。その書籍は、清水寛（埼玉大学名誉教）の「障害児教育とは何か」だ。その中で当時の寛と益雄のやりとりが記されている。

障害のある子どもに向き合えるのか自問自答する寛は、一九五八年、大学講師の勧めで糸賀一雄、田中昌人らを訪問し、益雄に会うために長崎へ向かう。

「私はこの仕事に向いていないと思う。先生には、きらいな子はいないのですか？」と寛は益雄に問う。益雄は、「います。好きになろうと思えば思うほど、心が冷めてしまうこともあります。」と答える。

寛は、「そういう時は、どうするんですか？」と問うと、「その子といっしょに、しずかな山へ行って一日どんぐりを拾うとか、白い雲を眺めて、ふたりですわっているとか、そうすると、なんとなく心が通じてきて穏やかになって理解しあえたような気持ちになる。その繰り返しですよ」と益雄は答えている。

（久）

北河内ブロック新歓教研
「そうだ！先輩に聞こう！」

「わからないことだらけ…」でも「一人で何とかしないといけない訳じゃない！」
初任者もベテランも集まって学び合いました！

4月29日（金・祝）にラポールひらかたにて、北河内ブロック7分会（交野支援、四條畷校、寝屋川支援、枚方支援、守口支援、光陽支援、思斉支援）合同で、新歓教研「そうだ！先輩に聞こう！」を行いました。初任の方や初めて講師になられた方など18人が参加し、それぞれの経験談や権利学習、組合の紹介などで学び合いました。

「ちょっと先輩」の話を熱心に聞き入る参加者のみなさん

まずは、恒例の「ちょっと先輩の話」からスタートしました。この春初めて支援学校で働く先生方よりも経験年数が「ちょっと先輩」の枚方支援学校の先生お二人から、自身の経験を振り返ってお話していただきました。

一人目の方は、大学を卒業してすぐに初任者として支援学校で働き始め現在5年目の先生で、1年目は何もわからない不安の中でスタートした経験を話されました。「まわりの先生は次々仕事をすすめていくのに、自分は教えてもらわないと一人では何をすればいいのかわからない。授業準備だけでなく分掌の仕事など、実習やボランティアでは見えなかった仕事も加わり、とにかくわからないことだらけでつらかった」と、振り返りました。そんな中で、自分よりも先輩の先生がさらに先輩の先生に相談する姿を見たり、ベテランの先生からアドバイスを受けたりするうちに「自分だけで何とかしないとだめだと思っていたけれど、そうではないと気づいた。今も分からないことを質問したり、悩みを聞いてもらったりして乗り切っている。いろいろなアドバイスを受け、すべてを取り入れたことで失敗もあったが、経験を積んできて、いろんな見方があるんだなと、アドバイスの受け入れ方も大人になってきた」と話されました。

続けて二人目の方は、複数の学校で講師を経験されてきた初任の先生でした。大学の先輩から声をかけられたことがきっかけで初めて講師をすることになった時、「支援学校ってどんなところ？」と不安に思いながらスタートしたそうです。職場に入ってみると、複数担任でのチームティーチングに楽しさを感じたこと、子どもが一所懸命にとりくんでいる姿に励まされ、喜びを身近に感じられることが活力となって続けてきたと話されました。「職場には幅広い年齢の人がいて、しんどい時にはいろんな人のアドバイスを聞いて、自分も成長できる。子どもとの関わりで悩むこともあったが、何回もぶつかりながらあきらめず粘り強く関わったことで、こちらに心を開いて関係を築くことができた時、この仕事に魅力を感じた。天職だと思っている」と話されました。

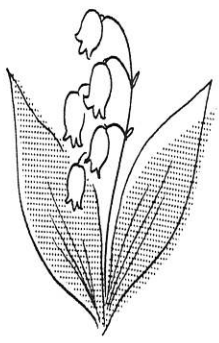
お二人の発表を聞いて参加者それぞれが感じたことや、自分も今こんなことで困っていて聞いてほしい、といったことを出し合いました。「保護者との話など、自分より経験の長い先生に任せてばかりでなく自分もやっていかないと成長できないと思うが、やりますと言う自信がない」「わからないことを聞きたいが、みんな忙しそうで話しかけづらい」「専門外の授業を持ってどうしたらいいのかわからない」などの悩みが出されました。ベテラン勢を中心にアドバイスをしたり、「自分も同じ思い」と共感の声を寄せ合ったりしながら、活発に意見交流し、経験年数を超えてお互いに学び合いました。

後半は権利学習や組合の紹介をしました。四條畷校の青年部の先生から「私の職場はいい職場です。いい職場とは、と先輩の先生方から学んできた。いい職場であるためには組合が大事。組合の主催する学習会に参加して子どもを見る目や発達のことも学んできた。自分にブレない軸があるのは、組合で学んできたことが根付いているからだと思う。みなさんもぜひ参加してください」と呼びかけました。

最後にベテランの先生から、「若い時はわからないことがあって当然。思うようにならない時は、子どもを思うようにさせようと思うこと自体が、うまくいかない理由かもしれない。支援学校のいいところは、高い自由度で子どものために授業を作れるところ。授業だけでなく、職場も作っていける。周りの人と協力して、子どもにも大人にもいい学校を思い描いていってください」と温かく励まされました。

北河内ブロック合同の新歓教研は今年度で5回目となりました。昨年度はコロナの影響で会場が使用できず、苦肉の策で、紙面でやり取りするレポート交流の形をとりました。それもよかったのですが、今年度は感染対策に気を配りながら2年ぶりに会場で実施することができ、やっぱり顔を合わせるとその場で思ったことや聞きたいことをやり取りできて元気が出るなあ、と感じました。

（枚方支援学校分会　林陽子）



参加者の感想

○年齢や経験年数が同じくらいの先生方の話を聞くことで、自分が1年どのように働いていくのかのイメージがわきました。

○実体験を交えながら聞けたことで「自分だけじゃないんや」と安心することができる良い機会でした。

○リアルな声が聞けて良かったです。先輩の先生からアドバイスをいただけて不安が軽くなりました。

○それぞれ悩まれていることがあり、今の現場の若い先生たちへの関わりを考える機会になりました。